

記憶と真正さの狭間で — *The Actual* 論

竹腰 佳誉子

Hanging Between Memory and Actuality: A Study of *The Actual*

Kayoko TAKEGOSHI

キーワード：ソール・ベロー，ジャン・ボードリヤール，シミュレーション，シミュラクル

keywords：Saul Bellow, Jean Baudrillard, simulation, simulacre

I はじめに

ソール・ベロー（Saul Bellow）の晩年の作品である *The Actual*（1997）は、主人公ハリー・トゥレルマン（Harry Trellman）の高校時代の恋愛の復活の暗示までを綴った物語である。ベローの代表的作品のひとつである *Henderson the Rain King*（1959）の主人公ユーゼン・ヘンダーソン（Eugene Henderson）もハリー同様、中年のインテリ男性である。両者とも一般的な基準に照らせば、成功を収めている人物であるにもかかわらず、絶えず満たされない思いを抱き、苦悩している。しかしながら、両者のこの苦悩との付き合い方は対照的である。ヘンダーソンは、自らが抱える問題に対し、人目をはばからず大声で泣き叫び、果てはアフリカまで飛び出してしまうほど行動的である。一方ハリーは、ヘンダーソンと比較すると実に静かである。そのため我々読者は、ハリーの豊かな表情を見ることはない。ハリーは、冷静沈着で自分の気持ちを表に出すことを好まないため、読者はただのっぺらぼうのハリーの顔しか思い浮かべることはできないのである。ハリーは、煩わしい人間関係を断ち切ることで、人間関係から生じる複雑な問題に振り回されることがないかわりに、人とのつながりの希薄さのなかでひっそりと生きている。もっともこの希薄さについていえば、彼個人による責任だけではないだろう。語り手が「シカゴのような土地での最大の脅威は空虚さだ——人との間の溝や断絶、漂白剤のような匂いのするある種の精神的なオゾンだ」（TA 4）と述べているように、もはや社会全体が主人公がそのような対処せざるを得ないような状況になっているのである。ハリーは、自分の心を閉ざし、ただ記憶、ある

いは想像のなかでのみ、自分の本当の気持ちをさらけ出すという方法で、この社会から身を守り、かろうじて人とのつながりのようなものを保ってきたのである。そこには相変わらずヘンダーソンを含むソール・ベロー作品の他の主人公同様、本来いるべき場所、言い換えるならば本作品タイトルである「アクチュアル」と呼ぶべきものから逃げ出し、再び自ら回避していた「アクチュアル」と呼ぶべきものに戻るべく、その方法を模索している主人公の姿がある。

本稿では、作品のなかの記憶、過去、真正さ、あるいはその意味についてジャン・ボードリヤール（Jean Baudrillard）の概念の枠組みを使って探るとともに、主人公にとっての「アクチュアル」と呼ぶべきもの、たとえば「本物の」自己、「本物の」恋人、「本物の」恋愛、「本物の」人生、「本物の」社会の発見の可能性について考察したいと思う。

II 記憶

ハリーは、高校時代の恋人であったエイミ（Amy Wustrin）と自身の記憶の中で、あるいは想像の中でいつでも「高校時代のエイミ」と向き合うことができると語っている。ハリーの言葉通り読者は、物語を読み進めるとすぐに、彼の記憶のなかのエイミの詳細な描かれ方から彼のすぐれた記憶力に気がつくだろう。ハリーがお金持ちの老人シグマンド・アドレッスキ（Sigmund Adletsky）の目にとまったのもアドレッスキが「明らかに第一級の観察者」（TA 16）と呼んだ彼の観察力と状況を正確に記憶していたその記憶力のおかげである。このようなベローの記憶や過去へのこだわりは、他の作品にも見られる。『ベラローザ・コネクション』（*The Bellarosa*

Connection, 1989) では、記憶のプロである語り手が登場している。語り手は、物語の終わりで次のように語っている。

Suppose I were to talk to him about the roots of memory in feeling—about the themes that collect and hold the memory; if I were to tell him what retention of the past really means. Things like: “If sleep is forgetting, forgetting is also sleep, and sleep is to consciousness what death is to life. So that the Jews ask even God to remember, ‘Yiskor Elohim.’ ” (BC 89)

上記を踏まえれば、記憶とは生きることそのものといえるだろう。「記憶こそが人生だ」(“Memory is life.” BC 5) という語り手の言葉にもベローの気持ちをはっきりと表されている。またベローは、自身自身の記憶力についてのインタビュアーの質問に対して次のように答えている。

I didn’t even think of it as memory. I was always had an open channel to the past. It was accessible from the first. It was like turning around and going backward down the street.

(Gloria L. Cronin and Ben Siegel 257)

ベローにとって過去の記憶というものは、はるかかなたにあるものではなく、後ろを振り返ればすぐ手に届くような身近な存在であることがわかる。ベローにしてみれば、過去は現在と切り離された断片ではなく、時間軸上において現在としっかりとつながりをもったものとして存在しているといえる。

ベローの引用を挙げるまでもなく記憶が生、つまり現在と結びついていることは記憶のメカニズムを考慮すればおのずと分かる。例えば、港は記憶について次のように述べている。

人間の記憶は個々の事柄の痕跡が保存されてできているのではなく、現在との関係においてつねに生成しているものである。それは一度入力されれば消えないような静的イメージではなく、環境との物理的な関わりにおいて

ダイナミックに変化してゆくものである。
(港 168)

港が指摘しているように記憶とは、写真のようにある瞬間をはさみで切り取ってそのまま保存するような類のものではない。記憶している人と記憶内容との関係、現在との関係、現在の置かれている状況、あるいは感情に左右され、いかようにも創造されるということである。例えばある過去の事件の記憶についていえば、記憶している人とその事件との関わり方やその人の現在の状況によって、同じ事件についての記憶がそれぞれ全く異なったり、微妙にずれていたりすることはよくあることであろう。してみれば、記憶はもはや記憶者のイメージにすぎないのかもしれない。

ハリーの場合について考えると、エイミに関する記憶や彼の記憶に基づく描写は、非常にリアルに描かれているにもかかわらず、彼がエイミに偶然出会ったときハリーは、「心の中でほとんど毎日のように会っている女性だとはわからなかった」(TA 20)と告白している。また「この私が会ってもわからないようなら、彼女はもはや別人だということになる」(TA 21)というハリーの言葉や「私は彼女のイメージを15の頃のままだに保っていた」(TA 22)という言葉には、「実際のエイミ」と彼の思い描く「イメージのエイミ」には明らかな差があることをハリー自身認めていることが表れている。そしてハリーは、エイミについて次のように述べている。

Half a century of feeling is invested in her, of fantasy, speculation, and absorption, of imaginary conversation. After forty years of concentrated imagining, I feel able to picture her at any moment of any given day. (TA 20)

上記の引用からもハリーが自分の記憶を基に描いていたエイミは、もはや彼のイメージに過ぎないことは明らかである。エイミがハンドバッグから鍵を出すときに立ち上るであろうダブルmint・ガムの香りやシャワーを浴びるときの彼女の顔の角度も彼が作り上げたイメージである。ハリーは、「架空の会話」まで成立させるほどエイミのイメージを作り込んでいる。さらに物語の語り手でもあるハリーは、

明らかにエイミをその目で観察しているがごとく描写しつつ、我々読者もハリーから語られるエイミが本当にそのようなしぐさで、あるいは表情でそこに存在しているような錯覚に陥っている。それはもはや記憶の領域を超えているといえるだろう。

『シミュラクルとシミュレーション』において、ボードリヤールは現実とイメージの関係を四つに分類している。一つ目は現実の忠実な反映としてのイメージ、二つ目は現実を歪めるイメージ、三つ目は現実の不在を隠すイメージ、四つ目はいかなる現実とも無関係なイメージである(8)。ボードリヤールは、最後のイメージについて「イメージはそれ自身純粋なシミュラクル」(『シミュラクルとシミュレーション』8)であると述べている。シミュラクルとは、「決して実在と交換せず、自己と交換するしかない、しかも、どこにも照合するものも、周辺もないエンドレス回路の中で」(『シミュラクルとシミュレーション』8)。この状況は、映画マトリックス (*The Matrix*, 1999) で描かれる世界を我々に思い起こさせる。現実だと思っていた、あるいは思い込んでいた世界が実際は仮想現実であったという恐怖である。ボードリヤールのイメージについての分類を踏まえると、前述のハリーの現実とイメージの関係は、単純に「現実の不在を隠すイメージ」ということもできるだろう。しかしながらハリーが「実際の」エイミに出会っていないながら、彼女が分からないということになれば、ハリーによって語られるさまざまなエイミのイメージは、「現実とは無関係なイメージ」になっているとはいえないだろうか。つまりボードリヤールがいうところの「客観的現実を必要としないシミュラクル」である。ハリーは、偶然出くわしたエイミに気づかなかったことについて、「エイミは現実の世界にいて、私はそこにいなかったのだ」(TA 21) と語っているように、ハリーの生きている世界は現実の世界ではなく、彼がひっそりと逃げ出してしまった現実の世界と同じくらいリアルな世界なのである。それはちょうどボードリヤールのいうアメリカ合衆国そのものと似ているのかもしれない。

アメリカは夢でもなく、現実でもない。それはハイパーリアリティである。現実化したものとして最初から体験されてきたユートピアであるがゆえに、アメリカはハイパーリアリ

ティなのだ。(『アメリカ』47)

実体などはなく、いかなる現実とも無関係なイメージだけを消費しているような社会においては、完了形としてかつて確かに存在したもの、つまり古いもの、過去のものが「古い物の神話」(『物の体系』92)として必要とされる。古いものは、「起源へのノスタルジー」(『物の体系』92)である。現在というなかで回帰的に消費するためにハリーやエイミは、自分たちが置かれている世界において「起源の神話」(『物の体系』92)としての古いものに携わることが可能である仕事に就くことで、この社会でなんとかバランスを保とうとしている。あるいはこのハイパーリアルな世界に埋もれてしまわないようにしているのではないだろうか。例えばハリーは、古美術商としてかつて確かに存在していたものをつなげる仕事をしているし、エイミは、インテリアコーディネーターとしてやはり完了形で存在しているアンティーク品の目利きをしている。

ボードリヤールによると「古いものが応じている要求は、決定的な存在、完成された存在を求める要求である。神話的なものが持っている時制は完了形である。それはかつて起こったように現在生じていることであり、またそのことによって、それ自体の上に《真正な》ものとして基礎付けられている」(『物の体系』91)。つまり古いものは「真正さ」と結びついているのということである。

Ⅲ 真正さ

ハリーがエイミとの恋愛の復活の橋渡し役を担うアドレッキや、ハリーがアドレッキと出会うきっかけとなったパーティの主催者であるフランシス・ジェリコー (Frances Jellicoe) がある種の「真正さ」を持っているように見えるのは、先述したボードリヤールの言葉に従えば、彼らが「起源の神話」に応じる過去の実績や過去とのつながりが誰の目にも明らかたためである。アドレッキは、メキシコのカリブ海沿岸に比類ない豪華な大ホテルを築き、チャールズ王子やドナルド・トランプ (Donald Trump) 同様どこにでも通用する名前を持っている。ジェリコーは、名門一家の出身で、ヒエロニムス・ボス (Hieronymus Bosch), ボッティチェリ (Botticelli), ゴヤ (Goya), ピカソ (Picasso) といった錚々たる

芸術家の作品を保有している。ボードリヤールは、「或る物が著名な有力者の所属であったという事実が、その物に価値を与える」（『物の体系』93）と指摘している。してみれば、アドレッキの名前やジェリコーが所有している芸術品の価値、言い換えるならばそれらが持つ真正さが、その所有者にも同じように真正さを与えることを可能にしているということになるだろう。そしてその真正さは、ハリーが陥っている世界で他者との差異を生み出しているように思われる。

そもそもハリーにとっては、アドレッキ自身が「起源の神話」のメタファーになっているのではないだろうか。物語の中でハリーの母親については時々語られているが、父親については一介の大工だったこと以外はとくに語られてはおらず、両親の都合で孤児院へ入れられたハリーにとって両親とのつながりは希薄であるといわざるを得ない。さらに東洋人風の顔立ちも両親とのつながりを断ち切ってしまう要素のひとつとなっているように思われる。先述したハイパーリアルな世界での古いものへのフェティシズムと真正さの関係は、起源の神話性に由来するが、ボードリヤールによれば「創造の跡の探求は、系統と父親的な優秀性の探求でもある。真正性は常に父に由来している」（『物の体系』93）。まさに「父は価値の源泉」（『物の体系』93）なのである。

アドレッキは先に示したように大富豪であり、「無限の適応力で様々な分野をまたにかけて上へ上へとの上がってきた」（TA 17）文字通り民主主義と資本主義から成るアメリカ合衆国という父の申し子と呼べる人物である。もっともアドレッキはユダヤ人であるのだが、ユダヤ人のハリーにしてみればユダヤ人であるアドレッキがまさに彼の求める父親像と重なるはずである。ハリーは無意識のうちにアメリカという国の創造の父を求め、その姿をアドレッキに重ね合わせていたと思われる。だからこそアメリカという国の子孫であるアドレッキが直々にハリーに扉を開いてくれたことを受け入れて、下記の引用に示されるように彼の真意に疑いをもちつつも彼の懐へ思い切って飛び込んでみようとしていたのではないだろうか。

You don't discuss the outlines of your emotional life with one of the richest men in the world — not even if he wants to do

you some good. Maybe he saw that my mystery was, at bottom, nothing but misery. (TA 86)

少なくともハリーは、アドレッキに自分の本心を見透かされていることに気づきつつも彼とのつきあいをやめることはしなかった。また見透かされているであろうと考えることで自分自身と向き合うことができている。そのきっかけをアドレッキに与えられたのは間違いない。しかもアドレッキにはハリー同様「観察者の素質」（TA, 81）、つまり本物を見抜く力が備わっているものであり、その力が確かであることをハリーも認めている。ここにもアドレッキのもつ真正さが暗示されている。そしてアドレッキは、ハリーに真正さを見抜く力があることを何度となくほめかしている。アドレッキはボードー・ハイジンガー（Bodo Heisinger）の家具つきの屋敷の購入に際し、ハリーにアンティーク家具の目利きを依頼する。そしてアドレッキはハリーに「なに、あれが偽物だったら、きっときみなら見抜けるさ。ちがうかね」（TA 83）と言ったり、「私はきみならボードーの贋物を見抜けると思う」（TA 84）と語ったりして、ハリーが持つ真正さを見抜く力を再認識するよう導いている。つまり、アドレッキという「起源の神話」のメタファーを介して、真正性に由来するアドレッキを通じて、ハリーは真正さ、そして自らの真正さについて問い直すことになる。

IV まとめ—真正さのなかで生きる

ハリーが真正さのなかで生きることを拒み、周りの人々のみならず自らに対しても真正な態度で向き合うことを避けてきたのはどうしてだろうか。それは冒頭に記したとおり、現代社会の空虚さ——人との間の溝や断絶という脅威から身を守るためであった。一旦この脅威に飲み込まれると彼が軽蔑するひとたちのような状態になる恐れがあったからである。

These were all commonplace persons. I would never have let them think so, but it's time to admit that I looked down on them. They were lacking in higher motives. They were run-of-the-mill products of our mass democracy, with no

distinctive contribution to make to the history of the species, satisfied to pile up money or seduce women, to copulate, thrive in the sack as the degenerate children of Eros, male but not manly, and living, the men and women alike, on threadbare ideas, without beauty, without virtue, without the slightest independence of spirit — privileged in the way of money and goods, the beneficiaries of man's conquest of nature as the Enlightenment foresaw it and of the high-tech achievements that have transformed the material world. (TA 47)

ハリーはこれらの人物たちを見下し、自らもそうならないために自らの真正さを押し殺してきた。しかしその一方で彼はこれらの人物たちに備わっているかもしれないある力の可能性を認めていたように思われる。つまりマッジ・ハイジンガー (Madge Heisinger) やエイミの元夫であり、ハリーの親友であった今は亡きジェイ・ワストリン (Jay Wustrin) らの軽蔑すべき振る舞いのなかに見られる彼らの正直さであり、真正さである。少年時代にハリーとジェイと一緒に映画を見たときには、ジェイに冷たいやつだと言われて、「いろんな感情をこれでもかと押し付けられるのはごめんだな」(TA 107) とハリーは返答している。またハリーはエイミに「不正直であることに私はなんの苦労もしなかった。生き延びていくには、みんなをだまさないかならないって気がしてたんだ」(TA 78) と告白している。ジェイがあげっぴろげな男であったのに対し、ハリーは「秘密主義で、冷淡で、隣人を騙すことぐらい平気だった」(TA 81) と述べているように、秘密主義で自分の気持ちをかたくなに隠して生きてきた。それはもちろん他人に対してだけでなく、自分自身に対しても同じように振舞われた。

今は亡きジェイがかつて仕組んだ悪ふざけのおかげとアドレッキが段取りをしたジェイの棺の改葬の手伝いという口実が整い、ハリーは長年にわたって彼の記憶の中で構築し続けたエイミと、もしかするとそれとは全く別人のエイミと対峙することになる。それは同時にそのイメージを作り出した張本人である彼自身との対峙でもあったはずである。アドレッ

キが手配してくれたリムジンの中で、ハリーはイメージとしてのエイミ像をしだいに変えていくことになる。エイミの外見について改めて見直し、長年なじんだ見方を修正し、「彼女が私にどういう影響力を持っているのか、だんだんとわかってきた。他の女たちは幻影だった。彼女は、彼女だけは、決して幻ではなかった」(傍点筆者, TA 94) と感じ始めているのだった。

これまでハリーを支えてきたエイミのイメージは、はじめのうちは、既述したボードリヤールの分類に従えば「ひとつの奥深い現実の反映」(『シミュラクルとシミュレーション』8) だったはずである。しかし、彼の作り出すエイミのイメージは徐々に変化し、エスカレートしていく。そして、「本物の」エイミに出会っても彼女とは分からないにもかかわらず、様々な彼女の表情を、そして彼女との会話を次々にイメージできる「いかなる現実とも無関係」(『シミュラクルとシミュレーション』8) な第4段階に移行していく。この段階においてイメージは、「偽物と本物を区別することもない。すでに死に絶え、前もって蘇っている」(『シミュラクルとシミュレーション』9) ののである。してみれば、ごく最近までのハリーにとっては、「本物の」エイミはそもそも存在していなかったということになるだろう。ハリーは、この第4段階のイメージ、ボードリヤールの言葉を借りるならば、「シミュラクル」の罠から抜け出すために、自ら行動を起こし始める。

改葬の最中にハリーは、ジェイやマッジについてたわいもないと思われる話題をエイミと話しながら、今まさにそこに存在している自分自身とエイミが「不完全で欠陥はあるにしろ、さしあたり生者」(TA 110) であることに気づき、「自分の番が来る前になにかしらやるつもりなら、ぼつぼつ行動を起こしたほうがよさそうだ」(TA 110) と悟るのだった。「永遠の命などというものはあらゆる人間的な行動を無価値にする」(傍点筆者, TA 114) というハリーの言葉にも、「すでに死に絶え、蘇っている」シミュラクルとの決別の思いが表れている。

死が間近に迫りつつあるアドレッキの存在と、もうすでに眠りについてしまったジェイの死の両方がハリーを行動に駆り立てている。そして自らに正直に、まさに真正さのなかで奔放に生きてきた、あるいは生きているジェイやマッジがハリーを行動に駆り立てている。埋葬のプロセスは、「すでに死に絶

え、前もって蘇っている」シミュラクルとは逆である。実際ハリーは、改葬の現場において「ここは自分を見直すにはたいのいところより具合がいい、その気があればね」(TA 93)と語り、エイミに次のように自分の気持ちを吐露する。

‘Yes, but I had more feeling for you than you realize. What I felt was very simple. You gave me relief from double-entry mental bookkeeping.’ (TA 94)

「心の複式簿記」(double-entry mental bookkeeping)という表現にハリーが長年携わってきた、言い換えるならば囚われてきた交換価値の概念が表れているように感じられる。それはまるで人間の気持ちまでも市場で流通する商品のように交換可能な価値があり、決算可能であるかのように扱われている。マイナスになることは当然許されないのであり、ハリーも一年の決算時にマイナスになることをひどく恐れていたのではないだろうか。そのため自分の気持ちに正直に生きること、真正さのなかで生きingことを拒んできたのであり、ハリーにはシミュラクルが必要だったのである。エイミは、交換不能な価値ある存在であり、それはシミュラクルで代用できるものではないのである。

ここで冒頭においてハリーは次のように述べていたことを思い出しておきたい。

In Boston or in Baltimore I would still have thought, daily and regularly, of the same woman — of what I *might have said* to her, of what she *might have answered*. (emphasis added, TA 4)

彼が向き合っていたエイミは、彼のイメージにすぎなかった。「私が言ったかもしれないこと」、そして「彼女が答えたかもしれないこと」は仮定、想像にすぎない。そこにはすでに「本物の」エイミは存在していないことがはっきりと述べられていたのである。彼が幻のエイミと対峙しているあいだに、本来彼が生きるべき現在、あるいはリアリティは彼の手の中に握られた砂のように、彼の指のすきまからどんどんこぼれ落ちてしまっていたのである。Jandtは未来志向のアメリカ人は、未来のために現在を生

きており、それでは今を生きることにはならないと述べている。同じように過去の記憶を元にイメージを作り上げ、さらに「いかなる現実とも無関係」なイメージの世界のなかで生きingことは、今を生きていないということになるだろう。これらは両方とも「アクチュアル」と呼ぶべきものを見過ごしている可能性があるからだ。

そしてハリーは、「本物の」エイミに自分の心情を吐露する。

‘After forty years of thinking it over, the best description I could come up with was “an *actual affinity*.”’ … ‘Other women might remind me of you, but there was only one *actual Amy*.’ (emphasis added, TA 113)

ここで初めてハリーは、「本物の好みの相手」が「本物のエイミ」であることを確信している。この言葉を発した後のハリーと「本物の」エイミとの会話は非常にぎこちないものだった。しかし「自分をさらけ出して座っていた。本音は一切出さないように修練を積んできたのだが。今このときの私はあやういまでに見え見えだった」(TA 115)という描写からは、ハリーの本物の気持ちが表れていることが認められる。

ハリーは最後に次のように語っている。

I stood back from myself and looked into Amy’s face. No one else on all this earth had such features. This *was* the most amazing thing in the life of the world. (TA 116)

ハリーは、かつて自分を支えていたシミュラクルとしてのエイミ像と「この地球上に二人としない」本物のエイミとの差別化を図っている。真正さの由来となるアドレッキとの出会い、そして彼を介しての「本物の」エイミとの再会を通じて、ハリーは、「本物の」エイミ、「本物の」自分自身、「本物の」恋愛、「本物の」彼の人生が、今まさにこの瞬間にこそ存在していると感じ取っている。だからこそハリーは、物語の最後で「本物の」エイミにプロポーズするのである。これは彼が逃げていたエイミ

というシミュラクルで成り立っている世界からの脱却を意味する。ベローは自分の真正さと向き合い、そのなかで生きるときのみこれらのものを得ることができるということを、人生の後半戦を生きるハリーに、ひいては読者に実感させているとともに、そうすることのきっかけと勇気を与えているのではないだろうか。そして、結末において、ハリーとエイミの恋愛の復活の暗示に止まったことは、このハイパーリアルな世界の罫の巧妙さと恐ろしさを示しているのかもしれない。なぜなら、「ハイパー現実となったのは、今日では現実そのものの方」(『象徴交換と死』176)なのだから。

* 本稿は、第20回日本ソール・ベロー協会大会(2008年9月10日 青山学院大学)における口頭発表原稿に加筆修正を施したものである。

引用文献

- Baudrillard, Jean. *Amerique*. 『アメリカ』 田中正人訳 東京、法政大学出版、1988年。
- . *Le système des objets*. 『物の体系』 宇波彰訳 東京、法政大学出版局、1980年。
- . *L'échange symbolique et la mort*. 『象徴交換と死』 今村仁司・塚原史訳 東京、筑摩書房、1992年。
- . *Simulacres et Simulation*. 『シミュラクルとシミュレーション』 竹原あき子訳 東京、法政大学出版局、1984年。
- Bellow, Saul. *The Actual*. London: Penguin Books, 1997.
- . *Something to Remember Me By: Three Tales*. London: Penguin Books, 1991.
- Conin, Gloria L., and Ben Siegel. ed. *Conversations with Saul Bellow*. Jackson: University Press of Mississippi, 1994.
- Jandt, Fred E. *An Introduction to Intercultural Communication: Identities in a Global Community*. California: Saga Publications, Inc. 2007.
- 港 千尋 『記憶 — 「創造」と「想起」の力』 東京、講談社、1996年。

(2009年11月16日受付)

(2009年12月22日受理)

